

# 狐の嫁入り

## ●八十内

昔、惣吾郎内、八十内、竜生間の交通路は、亀石川（広戸川の上流）を渡る田んぼ道で、ゲンバチキという杉のこんもりとした中に小さな稲荷様があり、この近くを通るのであった。ここに色々と昔話が生まれていた。

ある夜、権さんが川を渡って稲荷様に近づくと、自分の歩いて行く道の前後両側を何かがつきまといっているようで、全身ゾッと身ぶるいした。変だと思つてタバコに火をつけ、買って来た魚、油揚げ、卵の包みを首にかけ、帰り足を急いだ。この権さんの家の所までつきまといつていたのは、狐だったという。

それからある日、結婚祝いに招かれての帰り夜道、風呂敷包みを首に、藁で作ったツトッコにお膳のご馳走や魚をつめ、これを肩にかけて都々逸を流し、ご機嫌よく川を渡ると。ピタリと歌声が止まった。

それもそのはず、そこには彼の心に秘めたいとしの彼女が、いとも美しい姿で迎えに来てくれていた。彼女に手を引かれて行った所は素晴らしいお宮の前で、そこは幕を張ったきれいな座敷に徳利や盃などがしつらえてあった。彼は持参のご馳走を全部開いて上機嫌していると、美女達が次々にあらわれ、呑めや歌えと狐拳で大騒ぎ。すっかり有頂天となった。

## 民話 2

やがて家にたどり着き気がつく、なんとフンドシ一本。翌朝、おぼろな記憶を呼びおこしながら、密かに女房とさがし歩いたところ、財布と煙草入れは稲荷様の祠の前にあり、ご馳走は何もなく狐の足跡だけが一面に残っていた。

こうした狐たちは、入梅の明ける初夏の雨雲たれこめた夕暮れもおそく、稲荷様の南方田んぼをへだてた向い山岸に、狐の嫁入りを見せたものだった。まず一番の提灯がつく、次に一番三番四番とポーポーと灯がついて、長い長い行列となる。これを見つけた者が大声で狐の嫁入り始めたぞーと叫ぶと、みんな家の中から飛び出して見たぞうだ。

（稿者 目黒初雄）  
『天栄村の民話と伝説』から

